

## 第33回日本気象学会夏期特別セミナー (気象若手夏の学校) 開催報告

第33回日本気象学会夏の学校実行委員会  
(塚田大河\*1・宮本真希\*2ほか)

### 1. はじめに

第33回日本気象学会夏期特別セミナー(以下、夏の学校)が2021年9月10日(金)から12日(日)にかけて北海道大学が主幹校となって開催されました。本セミナーは学生および若手研究者の交流の場として毎年開催されており、33回目の開催となる今回は109名(社会人3名、博士課程20名、修士課程54名、学士課程31名、高校生1名)の方々にご参加いただきました。

昨年と同様にオンラインで行われた夏の学校では、北海道に縁のある3名の講師による招待講演および69件の発表で構成された一般講演に始まり、夜間に行われたレクリエーションや懇親会では現地開催に勝るとも劣らない盛り上がりが見られました(第1図)。さらに本年は参加者発案のワークショップ「気象表現革命」が開催されるなど、新たな開催形態の楽しみ方を模索する機会となりました。

### 2. 招待講演

大学で研究されている方2名と民間で活動されている方1名を講師としてお招きし、各日80分ずつご講演いただきました。異なる背景をお持ちの御三方によるご講演は非常に魅力的で、最後まで質問が絶えることはありませんでした。講演内容は以下の通りです。

安成哲平氏(北海道大学北極域研究センター准教授)  
「地球環境科学のキャリアパスを「大気エアロゾル」を通して見る—日本から世界へ、そして世界から日本へ—

安成准教授からは、大気エアロゾル研究を基軸としたご自身のキャリアパスについてのご講演と、学生の持つ可能性の大きさについて、熱いメッセージを賜りました。NASAでの研究経験の紹介を通して、世界に視野を広げることの意義や、人との繋がりの大切さを教えていただきました。さらに、人生を楽しむためのマインドセットについても触れ、悩み多き学生たちを勇気づけてくださいました。

稲津 将氏(北海道大学大学院理学研究院教授)  
「シラカバ花粉症の気象学者」

稲津教授には、前半はシラカバ花粉の飛散予測に至る苦節10余年の研究成果についてご講演を賜りました。シラカバ花粉症の気象学者として、花粉の飛散予測を成し遂げたいという強い想いを感じるご講演でした。後半は学生時代考えていたことについて、当時教わった研究者としての心構えや、数学的な気象学の捉え方、ご自身の苦悩などを赤裸々に語ってくださいました。ここでしか聞けない魅力溢れる講演内容に、参加者も釘付けだったようです。



第1図 集合写真.

\*1 北海道大学大学院環境科学院.

\*2 北海道大学大学院工学院.

natsugaku2021hokkaido@gmail.com

© 2022 日本気象学会

第1表 一般講演タイムテーブル.

日時	北の間	海の間	道の間
9/11 (土) 13:30-14:35	降水システム (6件)	気候システム (5件)	中層大気, 大気力学 (6件)
9/11 (土) 14:50-16:10	降水システム, 雲物理 (7件)	気候システム (7件)	大気境界層, 中層大気, 大気力学 (7件)
9/12 (日) 13:30-14:25	降水システム, 雲物理 (5件)	気候システム, 熱帯大気 (5件)	大気境界層, 雪氷, 大気力学 (6件)
9/12 (日) 14:40-15:40	降水システム, 雲物理 (5件)	気候システム, 降水システム, 熱帯大気 (4件)	気象予報, 観測手法, 大気力学 (5件)

山本太郎氏（一般財団法人北海道河川財団参事）  
「洪水氾濫によるリスクをどう低減させるか、最新の科学技術による治水」

山本氏には、最新の科学技術を用いた治水により、如何にして洪水氾濫による「リスク」を低減させるかについてお話しいただきました。リスク＝ハザード×曝露×脆弱性という観点から、我々の研究成果がどのようにリスクの低減につながるのか、つなげるべきなのかについて分かりやすく解説していただきました。工学的かつ民間の視点で語られた講演内容は参加者からも好評で、私たちの身の回りの防災を見つめ直すきっかけを与えていただきました。

### 3. 一般講演

本セミナーの2日目と3日目の午後には発表を希望した67名の参加者による一般講演がZoom上で行われました。北海道にちなんで「北の間」「海の間」「道の間」と名を冠する3つのセッションに分かれ（第1表）、ブレイクアウトルームの移動を以ってセッション間の行き来を可能としました。本年は、一般講演とフリースタイル発表の2つの発表形式を設け、それぞれ発表時間を5、10、15分と3、5分から選択していただきました。研究発表に限らず、自己紹介や宣伝など気象に関するあらゆる発表を行える場を設けることで、より多くの方に夏の学校を盛り上げていただくことが狙いです。また、外部に向けた初めての発表の場

として夏の学校に臨む方から沢山の議論をしたい方まで様々な層がいらっしやることから発表時間は選択制とし、時間内であれば質疑時間の長さは各発表者の任意としました。

開催終了後のアンケートでは、フリースタイル発表や質疑時間の確保に関する周知が不十分だったことに端を発するご指摘をいただきました。特に「ゆっくり質問を考えたい」「議論をたくさんしたい」などといったご意見は毎年挙がっていますが、近年は数十件もの一般講演が行われており、3日間という限られた時間の中でどのように充実した議論を実現するか、ということは歴代の実行委員会の皆様を悩ませてきた命題かと思われます。

### 4. おわりに

夏の学校にご参加いただいたみなさまに、深く感謝申し上げます。また、招待講演を快く引き受けくださった講演者の御三方に心より感謝申し上げます。さらに、今回も日本気象学会から資金援助を受けました。おかげさまで内容の濃い、素晴らしいセミナーにすることが出来ました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。次回（2022年）の第34回夏の学校は、九州大学が主幹となり開催される予定です。充実したセミナーとなることを願うとともに、それを通して学生・若手研究者間の交流が更に活発になることを期待しております。